

海図なきパイロット

小森 星児（復興塾塾長） <komori@kobe-yamate.ac.jp>

震災後、これで神戸は10年遅れた、この遅れを取り戻すために全力を挙げるべきだという俗論が何の疑いもなく受け入れられた。大規模な都市再開発、神戸空港の建設、復興住宅の大量供給など、もっと冷静な評価を求める声は復興促進の錦の御旗の前にかき消されてしまった。

この時、神戸復興塾は敢然と「被災地は10年遅れたのではなく、10年先の世界に投げ出されたのだ」と主張した。10年先の世界とは、本格的な高齢社会の到来で活力が低下し、国際化の進展で産業の空洞化が進み、国も地方も財政危機に直面する三重苦の世界であり、こうした問題に震災のため10年早く取り組まざるをえない故に神戸の復興には特別の意義を認める根拠があるというのがわれわれの提言であった。エンタプライズゾーンの提唱がその一例である。

10年先行論は制度の改革、既得権益の排除が先だという議論に、10年遅れ論はいかに国から復興資金を獲得するかという議論につながる。結局、1国2制度は認められない、現

行法・財政システムになじまぬ仕組みは採用できないという国の論理を切り崩せず、復興資金の増額でなんとか遅れを取り戻そうという現実論が貫かれた。そして、いまだに復興は何割進んだかという全く意味のない指標が新聞紙上を賑わせている。

不幸にして、三重苦の到来というわれわれの予言は的中した。政府も、出し遅れの感は否めないが、特区制度に取り組むことになった。われわれの提案は、10年間に限ってさまざまな規制を緩和する地区を被災地に設けるという内容であったが、大規模災害地域復興の壮大な社会モデルが実現していたであろう。

先日聞いた話であるが、神奈川県職員研修会である財界人は「神奈川県はタイタニックと同じだ。大惨事が目前に迫っているのに、乗組員は机の固定や食器の始末に追われている」と評したという。われわれの船も、あちこちで亀裂が生じ、前例やマニュアルが役立たない海域に入り込んだ。今ほど、パイロットの先見性と発信力が問われる時はない。

「ひょうごまちづくりプラットフォーム設立事業」始まる！

昨年12月、行政・NPO協働事業助成に応募し、この企画が通りました。NPO法人を設立して以来、「IT講習会」「あいウオーク」「コミュニティリンク」「修学旅行受け入れ」などいろんな事業をやってきましたが、やっと本来のミッションにストレートにつながる事業に出会えたような気がします。これまでの事業がミッションにつながらないという意味ではなく、それらをつなぐ太い幹が出来たということでしょうか。

行政・NPO協働事業助成

「ひょうごボランティアプラザ」の誕生により出来た新しい助成制度です。地域の課題解決や活性化を目的として、NPOと行政が協働して取り組む事業を対象とします。

初年度はNPOによる協働事業のアイデア提案、次年度は行政パートナーを見つけ提案の事業化に向けた具体的計画づくり、第3年度は計画に基づく協働事業の実施というホップ・ステップ・ジャンプ方式での提案実現をプログラムした制度です。これまでの行政提案による協働事業ではなく、NPO側の提案を協働事業にする新たな道筋としてその成果が注目されることです。まちづくりに対する活動支援や政策提言を活動の大きな柱とする「まち研」としては、当然取り組まざるを得ません。

提案の背景

兵庫県は「住宅マスタープラン」で次の目標を掲げています。

多様なライフスタイルとライフステージに適應する住宅・住環境の確保

持続可能な住宅・住環境とコミュニティの整備
地域特性を活かした交流社会の実現

これに基づき、昨年県内6ヶ所で、それぞれの地域テーマでフォーラムが開催され、NPO等ボラン

タリーセクターとの協働が呼びかけられました。次の課題としては、NPO等ボランティアセクターが協働するための条件・環境をどのように整えるべきかということがあります。

まちづくりプラットフォーム

まち研で提案した「ひょうごまちづくりプラットフォーム設立事業」は、簡単に言ってしまうと県内のボランティアなまちづくり活動をネットワークし、まちづくりプランナーと行政（県市町）との協働の場をつくることです。県下には、認証NPO法人だけで300近くの団体があり、その半数近くが活動ジャンルにまちづくりを含めています。法人化されていないNPO、その他の地縁組織をふくめると膨大な数になりますが、そのほとんどが地域の活動に特化しており、相互の交流も協働の機会も持たない孤立無縁に陥りやすいと言えます。一方、専門家もそれぞれの分野にとらわれがちで全県的な観点が希薄です。行政は、従来の縦割り・横割りの画一的な仕組みにとらわれがちです。「ひょうごまちづくりプラットフォーム」は、三者が平等に参画することでまずは「目的の共有」「情報の公開」「人材の交流」を実現し、全県下での協働まちづくりの活性化をめざします。

今年度の活動目標は、準備会で、専門家・NPOの組織づくり、県下2ヶ所でのワークショップ(但馬地区は3月9日に大屋町にて、播磨地区は3月15日に加西市にて開催します。参加希望の方は、まち研までお申し込みください。078-230-8511/LET07723@nifty.ne.jp)の実施、ひょうごまちづくりメルマガの試験発刊を行い、計画立案に向けた課題整理をしていきたいと考えています。メンバーであることにとらわれず参加者を募りたいのでご参加下さい。

野崎隆一<VZD07604@nifty.ne.jp>

JUCEE・NPOPプロジェクトへの参加

JUCEE : Japan-U.S.Community and Education Exchange

NPOP : N.P.O.Pathfinding Program

きっかけは、NPO法人ブレインヒューマニティからの紹介でアメリカのNPOスタッフ受け入れをJUCEEから打診されたことだった。海外NPO視察ツアーも2年間途絶えていたこともあり、また10月に計画していた「四都市まちづくりテレビ会議」

も念頭にあり受け入れを表明した。早速、日本事務局のセラジーンさんが神戸に来られ、まち研を希望している二人のプロフィールの説明を受け、その結果、二人のうちシアトルからのNPOフェローであるハイジ・ブリーズさんに決まった。

ハイジさんは、自分自身を芸術家・人類学者・社会事業家だと規定している。「地域発展のためのポマグラニット(柘榴)センター」に8年間在籍し、低所得者コミュニティに対し、人々が集える空間の提供を行うと共に、識字や環境教育などの芸術プログラムにも携わってきた。1988年には、論文のテーマ研究のため1年弱神戸に滞在した経験もある。

8月頃からメールでのやりとりが始まり、「テレビ会議」の事前取材のためシアトルを訪れていた駒沢大学の西村さんを手伝ったり、兵庫県北米事務所の北岡所長を訪ねて阪神大震災の勉強をしたりしてもらった。10月来日後の活動記録は次のとおり。

5日 東京のウェルカムパーティで初対面。若くてエネルギーッシュ。



6日 テレビ会議打合せに参加。その後、新幹線でしゃべり続けて神戸へ。

7日 まち研事務局で、行動プログラムについて打合せ。

8日 「夜会・ぼたんの会」打合せに参加。夜、ハーバーランドで歓迎会。

9日 「人と防災未来センター」見学。「ひょうごボランティアプラザ」見学とスタッフとの意見交換会。

10~11日 コミュニティサポートセンター神戸の活動に参加。「くるくる発電プロジェクト」「アメニティコート西宮いしざい~コミュニティ支援」

12日 武庫之荘倶楽部まちづくりワークショップに参加。

14日 住吉山田地区水車完成式典に参加。

15~16日 プラザ5・まちコミの活動に参加



19日 「四都市まちづくりテレビ会議」に出演



23日 神戸市参画と協働プラットフォームにて市職員との意見交換会に参加。シアトル市「近隣マッチングファンド」について説明。

25日 「まちづくりと新しいツーリズム~シアトル編」を講演。

26日 ジム・ディアス来神。神戸市職員との意見交換会に参加。

28日 たかとりコミュニティセンターを訪問。意見交換。

31日 ハーバーランドにてお別れパーティ。

NPO に関して、日米では文化や歴史的背景が違うのでお互いに情報交換しても参考にならないという意見を良く耳にする。この1ヶ月間、かなり多くの時間をハイジと過ごし、かなり根本的な事柄についても話し合うことができた。そこから驚くほど多くの共通の認識が得られた。それは、日米とも程度の差こそあれ、市民社会の確立、DEMOCRACYの完成は、まだまだ達成されていないということ。日米 NPO は、共通の課題を持って日々の活動を続けているという認識などである。最後に、神戸の NPO と交流しての感想を聞いたところ彼女の答えは「アメリカでは大手の NPOH は、ほとんど企業と変わらない。神戸で多くの草の根 NPO に出会って、自分たちの出発点での使命感 (MISSION) の大切さを思い出した」というものだった。

今年は、兵庫 = WASHINGTON 姉妹都市 40 周年でもあり、今度はこちらがシアトルに出かけて「日米まちづくり NPO サミット」のようなものを開催できればと思っている。

野崎隆一 <VZD07604@nifty.ne.jp>

日中友好・復興クルーズ 2003 (2003年8月8日~8月20日)

呼びかけ文・日程ができました

「呼びかけ文、日程」は、まちづくり研究所のホームページをご覧ください。 <http://www.netkobe.gr.jp/machiken/>

実行委員会結成される

昨年6月より始まった「復興クルーズ2003」の準備会は、ようやく12月24日に正式に実行委員会が発足しました。実行委員長石東直子さん、実行副委員長室崎益輝さん、事務局長山田和生さん。プロジェクトの名称は「日中交流・復興クルーズ2003」。志を同じくする団体、個人の実行委員会への参加を呼びかけています。神戸市の「後援」は1月に決定しました。計画を進行する日本側の陣容が整いつつあります。



河北理工学院の図書館跡は地震当時のまま保存されている。

天津、唐山の調査すすむ

天津、唐山での交流、滞在、及び観光等についての打ち合わせと調査がすすんでいます。昨年10月の実行委員長石東直子さん、実行副委員長室崎益輝さんの訪中に続き、12月には事務局長山田和生さんが訪中し、天津大学の張先生や河北理工学院の蘇幼坡先生とお会いして現地での交流について、打ち合わせをすすめました。



滞在中の農家の食卓。お母さん手作りの朝ご飯にパクつく。

山田さんは、燕京号に体験乗船し、船中での調査にあたりました。また、天津、唐山、山海関を訪問し、天津近郊の村「王村」では今年8月に出発することで計画をすすめている「日中交流・復興クルーズ2003」の農村

滞在が可能であることを確認してきました。

1月24日には現地での段取りを担う天津中国国際旅行社の黄勝副社長と趙発永外聯部長が神戸を訪れました。実行委員会との会議では、段取りの詳細についての検討が行われました。

川村憲之さんが事務局員として参画

実行委員会に団体として参加している神戸復興塾は、1月7日の「復興塾・NPO法人まちづくり研究所合同委員会」において、川村憲之さんが復興クルーズの事務局員となることを確認しました。すでに実質的なお世話をかけている川村さんには、まち研の他の業務に差し障りのないように配慮しつつ、実行委員会の事務局員として参画し、活躍していただくことになりました。

強力なサポーターが続々と参加予定

塾生の多様な分野の専門家が実行委員会のメンバーとなり、更にクルーズへの乗船希望を表明しています。従って、強力な医療体制も整い、旅程での船酔い

はもちろん心身の不調者には適切な対応ができることになりました。映像の専門家の参加も予定されており、震災等の映像を通じての交流や、



万里の長城を龍に見立てると、ここが頭。老龍頭にはちゃんと角がある。

映像記録も期待されます。また、学生がボランティアとして参加することを検討している大学があります。サンフランシスコからは、同じ震災の経験の交流のために参加を検討したいというNPOからの申し出があります。

その他、往復で4泊する船上では、多分野の専門家が講師となり、震災の経験を学んだり、中国の生活や文化を学ぶ企画を計画しようとしています。

震災で親を亡くした子どもたちを招待します

震災で親を亡くした子どもたちを復興クルーズに招待することになっています。できるだけたくさん子どもたちを招待できるように、寄付金を募ります。そのために、国際コミュニティー基金、アジア草の根基金等へ助成を申請をしました。六甲アイランド基金には報告書づくりと報告会開催について助成金の申請をしています。

山田和生((株)マイチケット) < info@myticket.jp >

4都市TV会議「草の根NPOの挑戦:シアトル発日本着 まちづくりの思想」

平成14年10月9日、4都市国際TV会議が開催された。これは駒沢大学創立百周年記念事業の一つとして企画され、シアトル市と東京都世田谷区、三重県津市、そして神戸の4都市のNPOや行政関係者が連携して、TV会議を行ったものである。テーマは、草の根NPOによる「まちづくり」のあり方について、成功実績を持つシアトルを参照にしつつ、相互の情報交換と意見交流を行う事であった。神戸の会場は、人と防災未来センター。スタッフを含め、30名弱の参加者が集まった。会場のスクリーンには、各都市からの映像が順次内容に即して映し出される事になる。

会議は、神戸からのフュージョン演奏で幕を明け、駒沢大学学長大谷氏、世田谷区長、津市長、神戸からは桜井市民参画推進局長の挨拶が続き、それらを受けて、マッチングファンドシステムをシアトルで実現した前市長、ジム・ディアス氏の紹介と挨拶が行われた。そして当日の議論をより深め、共通の認識を持つために、事前に各都市でのNPOによるまちづくり活動取材撮影し編集されたビデオ「草の根NPOの挑戦」が上映された。約20分間にコンパクトにまとめられた内容は密度が高く、当日の進行上、大変有意義であったように思う。ここでは各都市での試み、特に行政とNPOの協働のあり方に重点が置かれ、神戸からは震災後の「まちづくり」の教訓の報告が中心となった。



上映後このビデオの内容に触れつつ、各都市の行政の試みなどが順に報告され、最後に駒沢大学長から各地へ茶掛けの贈呈が行われて、前半の午前の部が終了した。シアトルの会場は、時差の関係上、ここまでの参加であった。

昼食の時間を挟んで午後の会議は、津市のNPOによる「唐人おどり」からスタートした。異形の仮面・衣装を身につけた人々による独特の踊りを、TV会議システムはきちんと伝えてくれる。

午前の会議はどちらかといえば各都市間の現況報告といった感が強かったが、午後からはNPOの

現場で動く人々が、より実践的具体的な内容について議論を行う場として企画された。企画担当グループでは事前に「地方自治体と草の根NPOの協働」という観点から、その「協働のプロセス」を7つのポイントに整理しておき、これに沿って相互の報告と議論、さらに会場からの質疑応答が行われた。その7つとは、

- ・ 目標の気づきと発見
- ・ 目標の優先順位の決定
- ・ 具体的な話合いとプロジェクトの遂行
- ・ 区民・市民の税金の有効な活用
- ・ 市民グループとNPOとの協働
- ・ NPOや市民グループ・行政などがおこなうプロジェクトに対する評価の基準
- ・ NPO以外の幅広い市民団体の参加と草の根まちづくり活動の普及

である。世田谷の会場では、この議論の内容がグラフィックファシリテートされた。

各ポイントで報告いただいた内容は多岐にわたる。幾つか項目を拾い上げるだけでも、まちづくりにおける課題を集中させる必要性、NPOの責任分担の明確化、市民活動・ファンド・プログラムのいずれの段階においても指摘しうる不十分さ、多様な参加者・グループ・課題を解決する仕組みの必要性、地域の課題・状況を市民がどのように把握するのか、そのための情報の開示性、コーディネーターの新たな役割、各レベルでのスキルのマッチングとその事後評価の必要性、評価とフィードバックにおける大学の役割、などなど・・・。

筆者は午後の部の司会を担当したが、そこで感じたのは、このテーマはまだまだ実験的実践の過程であり、成果や結論がすぐにあらわれるものでもなく、またそれを一つにまとめるべきものでもない、ということだった。おそらく実践の処方箋は、各都市ごとにつくられてゆくべきだと思われる。そのことには、シアトルの成功事例も含めて、共通する基盤や課題、試行錯誤の過程など、相互の情報交流が何よりも豊かな滋養になるだろう。人と人との信頼関係がNPOでの協働の基礎にある、ということが今回の会議でも触れられたが、時間的地理的制約がある中で、TV会議というシステムは、相互に表情や仕草などを確認しながら議論を進める事ができるという点で、より望ましいやり方であると感じられた。今後は、この会議を期に生まれた連携を、いかに持続させるかが重要である。

松原永季 <ekky@kh.rim.or.jp>

人防研修オプション実施報告と修学旅行受け入れ計画

人防研修オプション「震災体験現地交流プログラム」

昨年10～12月の週1回、計10回の実施計画でした。残念ながら実際の実施回数は3回と少なかったが、参加者にはたいへん好評を頂き、実施したことの成果はそれなりに大きかったと思う。

来期の人防の研修プログラムに組み込まれると、もっと地域（現地）や人々の歩みなどを理解してもらえるのではと思う。

第1回・第6回のプログラムは芦屋コース

JR 芦屋 震災後区画整理を行った地域アーケードがなくなってしまった商店街の中の、震災前から地域の人々に無料で水を供給し、震災時多くの人々の生活水供給源になった井戸 旧西国街道 芦屋17（コレクティブ住宅）と歩いた。芦屋17は住民の年齢層が様々で、1Fの共同スペースは、住民はもちろん、地域交流のため周辺住民にも貸し出され、様々なイベント等に役立っている。参加者とコミュニティ他いろいろな問題点を懇談。

第8回のプログラムは新長田コース

真陽地域の子ども広場（アフガニスタンのシェルター） 六間筋商店街（震災時崩壊を免れた地域）

本町筋商店街（この商店街は多くがほぼ全壊で、新たに立て直した商店街。その中の商店主に震災時の体験話、現在の地域活動や防災などの話を聞く）

新長田駅前の地域コミュニティ「足湯」 JR線路沿いに建つ市営住宅角のたこ焼きやと歩いた。震災当時の話や区画整理によって、昔からあった地域の地蔵尊の管理や保存の話や震災体験談を聞く。

ざっと訪問のコースを紹介したが、これらのコースは参加者にはとても好評だったようだ。しかし、時間的な余裕が全くなかった事など反省点も多く、今後、人防の研修プログラムに正式に組み込むのならば、1日、最低でも半日は時間が欲しい所だ。今回の反省点としては、コース設定が多すぎた？こと、参加人数、研修終了時間がはっきりせず、現地との連絡がぎりぎりまでできなかったことなどがある。今後のこのプログラムを再度実施するのであれば、そうした反省点を見直しながら、人防スタッフに実際に現地体験をしてもらい、人防のスタッフと一緒にプログラムを組んでいきたいと思う。

JICA研修における現地交流プログラム

昨年12月10日に森栗副理事長がJICA研修にお

ける現地交流プログラムとして吾妻地区のまち歩きを実施した。参加者は総勢20名程になった。

コース内容は、JR三宮駅出発 旧西国街道をとり、国際マーケット跡の空地 生田川 震災後残った狭小住宅街 高齢者ケア施設 大安亭市場 全面コンクリートの中村八幡宮の現状を見学 コミスタこうべのまち研へ。



ここで昔の地図を見ながらこの地域の歴史の流れや現在の様子などを説明し コミスタこうべ内のNPO事務所・施設を訪問 HAT神戸へ。コレクティブ住宅見学 住民が自律運営している花壇 被災した酒屋が開いたイタリアンレストランへというコースを歩いた。今回JICA研修生の方たちは南米の方だったにも関わらず、皆さん、寒い中熱心に参加された。

修学旅行事業について、今年受け入れ予定

5月15日 名古屋市立津賀田中学校

5月21日 名古屋日比野中学校（昨年同様）

5月27日 名古屋市立東港中学校

修学旅行以外にも研修後の「震災体験現地交流プログラム」に参加の依頼がきています。

その他受け入れ予定

2月21日東海大学清水校 防災担当人・防での研修後「震災体験現地交流プログラム」参加が決定している。神戸外大を訪問して震災時「救援基地」となった学校の対応や防災の話など懇談を行う予定。

3月4日愛知県小牧商工会議所より店主（約30名）の長田区商店街視察。

重村智美 <LET07723@nifty.ne.jp>

神戸まちづくり研究所・神戸復興塾活動記録(2002/10～2003/2)

- 10/23 「シアトル NPO と神戸市の交流会」(ハイディさん)
25 ひょうごツーリズム協会訪問
地域活動推進講座「まちづくりと新しいツーリズム /シアトル」
26 地域活動推進講座「とことん知ろうまちづくり /甲南地区」
「ジム・ディアス氏と神戸市の交流会」(ディアスさん)
29 地域活動推進講座「とことん知ろうまちづくり /甲南地区」
31 ラジオ関西「おむすび ほっかほか訪問」企画委員会
- 11/ 7 とくしま NPO 連絡会議来所
9 マヌ都市建築グループ来神
12 吾妻ふれあいのまちづくり協議会ボランティア団体交流会
15 人と防災未来センター研修オプション受け入れ
地域活動推進講座「まちづくりと新しいツーリズム /被災地」
18 舞子高等学校環境防災科訪問
19 「NPO と神戸市の協働研究会」NPO 部会
22 日本システム開発研究所ヒアリング
25 「NPO と神戸市の協働研究会」世話人会
29 人と防災未来センター研修オプション受け入れ
31 吾妻まちかど広場チャリティ即売会へ参加
- 12/ 4 ラジオ関西「おむすび ほっかほか訪問」企画委員会
第 15 回復興住宅・コミュニティ支援研究会
7 地域活動推進講座「とことん知ろうまちづくり /灘中央地区」
復興クルーズ打ち合わせ
9 地域活動推進講座「とことん知ろうまちづくり /灘中央地区」
- 12/10 JICA 研修受け入れ
北海道庁ヒアリング
11 横浜市役所ヒアリング
12 NHK 大阪放送局ヒアリング
16 人と防災未来センター打ち合わせ
19 生活復興のための NPO 活動支援事業中間報告会
20 地域活動推進講座「まちづくりと新しいツーリズム /ヨーロッパ」
24 ラジオ関西「おむすび ほっかほか訪問」企画委員会
日中友好・復興クルーズ 2003 実行委員会
25 「NPO と神戸市の協働研究会」NPO 部会
- 1/ 7 「NPO と神戸市の協働研究会」世話人会
復興塾・まち研合同委員会
10 地域活動推進講座「まちづくりと新しいツーリズム /オルタナティブツアー」
13 HVP 行政・NPO 協働助成公開プレゼンテーション
14 日中友好・復興クルーズ 2003 実行委員会
17 自主ウォーク(「神戸 Jiji ウォーク」「ツイウォーク(追憶)」)
21 「兵庫まちづくりプラットフォーム」設立準備会
24 地域活動推進講座「まちづくりと新しいツーリズム /大討論会」
27 第 16 回復興住宅・コミュニティ支援研究会
28 ひょうごツーリズム協会来所
29 「NPO と神戸市の協働研究会」世話人会
- 2/ 3 日中友好・復興クルーズ 2003 実行委員会
5 ラジオ関西「おむすび ほっかほか訪問」企画委員会

コレクティブオフィス『ほたる』さんの紹介(2002年10月入居)

「ほたる」の活動理念

「ほたる」は昔の日本にあたりまえにいた、ほたるを、現代社会におけるコミュニティにたとえて名付けてみました。昔は、あたりまえにあったコミュニティが、現代社会の構造の中で余分なものとしてないがしろにされてきたようにまたうつつうしがられているように思うのです。最近、ひとつひとつの精神構造がマクルーハンのいう神経拡張のメディアに依存するようになり、独自の判断を肉体空間においてできなくなりつつあるように危惧しています。そういった中、公園づくりなどの肉体空間を通して、再度、コミュニティをつくりなおそうというのが「ほたる」の活動理念です。

「ほたる」の活動目標

児童公園は、都市計画上、0.5km ごとに設置するように義務付けられています。知人の研究によると、政府が設定する際、km と mile を読み間違えて、つくられた適当なものらしいのです。現在、行政のシステムの中で維持管理されていますけれど、根本的に疑ってかかってみてはどうかと思うのです。昔でいえば共同農園、鎮守の森みたいなものが、近代国家システムという中で、無目的、無責任、無関心な公園となっていると思うのです。

「ほたる」の活動内容

ひとつでも多くの公園を、アーティストとともに魅力ある公園をつくりあげることが目的です。今年、CS 神戸の「くるくる発電」の市から借りている用地に、堀尾さん、二名良日さんという2人のアーティストとともに地元の方々と公園をつくっていかうと思っています。去年、シアトルの公園づくりを見て感じたのですが、血のかよった公園で、こんなのかという例を見せていただきました。そういった中、今までの神戸にはない、あたらしいカタチの公園づくりをアーティストとともにつくりたいと思います。

またデンマークとの交流を考えています。デンマークは、環境問題に大変熱心な国です。世界の風力発電の約 50% がデンマークでつくられていると聞きます。電力に対する国家的な取り組みが、日本とは大きく違います。京都に「風の学校」という施設があります。これはデンマークで日本人のスズキケンジさんが個人的につくった学校で、国際的に有名になり、京都の弥栄町が誘致したものです。理念を「くるくる発電」の方々と共につつデンマークとの国際交流を神戸でできればと考えています。

高野哲史 <satoshikohno@yahoo.co.jp >

まち研ニュース 5号

参画と協働のまちづくりの担い手となるために

室崎 益輝（神戸まちづくり研究所理事長） < murosaki@kobe-u.ac.jp >

震災とその後の復興の中で、私たちは多くのことを学んだ。その一つが、市民一人ひとりが地域社会に関心をもち関与しなければ、これからの社会が成り立っていかないということである。それを一言でいうと「参画と協働」ということになる。がしかし、わたしたちの学んだ教訓は、一言でいえるほど底の浅いものではない。参画と協働には、自律すること、共有すること、共助すること、協調すること、共創することが、システムとして求められるが、生易しいものではない。

行政、市民、メディア、企業、NPOの5つのセクターが、まずそのセクターそれぞれの内部で自由で平等な関係をつくりあげ、その上で互いのセクターを尊重しあう互恵の関係をつくりあげることが、求められるからである。真に平等で互恵の関係をつくりあげることが、あらゆる場面であらゆる組織で求められているとって過言ではない。「豊かなつな

がり」をつくりあげる時代に入った、といっ
てよい。

この意味では、まず「神戸まちづくり研究所」と「復興塾」が真に豊かなつながりを獲得しなければならない。自由で闊達で平等な雰囲気はあるけれども、互いの衝突の上でできあがった信頼があるのかということ、残念ながらイエスという自信がない。信頼をつくるのは発展のための衝突である。協働のための議論をもっと展開し、そこから互いの信頼をつくりあげることが、欠かせない。そのうえで、まちづくりの中間支援組織あるいはコーディネート組織として、社会の「つながり」づくりの一翼を担いうるように思う。本格的に「専門家集団」として、まちづくり協働事業に参画するにあたって、豊かなつながりの意味とその姿を、今一度考え直すことが必要かも知れない。

特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所・神戸復興塾

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通4丁目1番6号 TEL: 078-230-8511 FAX: 078-230-8512

E-mail = LET07723@nifty.ne.jp Homepage = <http://www.netkobe.gr.jp/machiken/>